絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2024-秋

No.106

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。

タジマハール　インド　1983年

【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人
文化財保護・芸術研究助成財団
FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

日本のユネスコ世界遺産10

三内丸山遺跡

（北海道・北東北の縄文遺跡群）

ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ　　撮影・冨吉真貴子

二〇二一年、北海道、青森県、岩手県、秋田県に点在する17の縄文時代の遺跡が「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界遺産に登録された。

青森県にある三内丸山遺跡は、大規模な集落の跡があり、そこにはシンボル的な三層の掘立柱建物をはじめとして竪穴住居群、高床倉庫群、大型竪穴建物群の一端が復元されている。建物の総数は七八〇軒ほどと推定されている。

この遺跡では有力者の墓と思われる環状配石墓（ストーンサークル）も発見されている。また、他地域との交易の成果を思わせる黒曜石、琥珀、翡翠製品などが出土している。

三内丸山遺跡は縄文時代の前期中頃から中期末葉（約五九〇〇～四二〇〇年前）のものと考えられている。そのような時代にあって集落の中に都市的な要素を秘めた施設が造られているのは驚きである。

ここに暮らしていた人々は自然とうまく共存してその恵みを得ていたと思われる。それにしても多くの謎が残る。では、遺跡から人々は、どんな理由で去っていったのだろうか。他の遺跡も含め、この世界遺産も謎とロマンに満ちている。

――上野の杜から
天海という人

東叡山 寛永寺貫首
浦井 正明（うらい・しょうみょう）

寛永二（一六二五）年の創建である寛永寺は明令和七年に創建四百周年を迎える。

明年十月十日には記念式典（法要）を営み、その後台東区の主催で、徳川宗家、尾張家、水戸家の各御当主を迎えてシンポジウムを開催、合せて大石学博士や壮大な『叡嶽双龍』と題する天井画（12ｍ×6ｍ）の作者手塚雄二画伯及び小衲の講演を予定している。

手塚画伯と小衲とは四半世紀にも及ぶ親交があり、前々から天井絵のことは話していたのだが、今回の四百周年に当り制作を依頼した処、即座に快諾を得た。

この前代未聞の大作は明年十月十日に公開されるので、是非楽しみにして戴きたい。

処で、寛永寺と言えば何といっても開山の慈眼大師天海大僧正だろう。

天海は福島の会津高田（現・美里町）の出身で、同地の豪族蘆名氏の一族の出であった。若くして出家し、地元の稲荷堂をはじめ足利学校や比叡山延暦寺、奈良の興福寺その他で、佛教は勿論、儒教、老子、荘子の思想、合せて一般教養も身に付けた。更に茨城、栃木の天台宗の大寺で就学、当代随一といわれる学問を会得した。

ただ、これ迄の天海の足跡は飛び飛びにしか判っていない。足跡が辿れるのは慶長十三（一六〇八）年に家康と初めて会ってからである。

もっとも、それ以前から家康は天海の存在は認識していた。既に文禄期（一五九二～九五）には信長の焼き討ち以来疲弊していた比叡山の復興を天海に一任しているし、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の合戦の時には日光山再興を天海に任せているのである。このことは当時関ヶ原の陣中にいた金地院崇伝に宛てた沢庵宗彭の極めて皮肉な書状から判る。

だから、家康が初めて天海と逢った時に「相見ることの遅きを恨む」と言い、これを機に天海を重用し、このことは秀忠、家光の時代まで続いた。これに対し、天海は一切阿ることなく、飽迄も自分の信念にもとづいた態度をとった。

例えば、慶長期に家康が定めた『寺社諸法度』などによって「紫衣特許」を寛永四年になって初めて禁止するという乱暴な通達。これは前々からの天皇の特権を犯すもので、金地院崇伝の献議によって家光が実施した。

天海はこれに大徳寺、妙心寺の側にたって反対した。幕府は大徳寺の沢庵、玉室、江月と妙心寺の単伝、東源を江戸に呼び、江月以外の四人を流罪にした。一人流罪を免れた江月は江戸に留まって赦免運動をし、越後村上の大名堀直寄の仲立で天海を知り、その力を借りたのである。ただ、将軍の名で処分したものは簡単に撤回できない。偶々寛永九年一月二十四日に大御所秀忠が逝去したので、その百ヶ日明けの日をまって四人を赦し、江戸に戻したのである。

この時天海は驚くべき行動に出る。沢庵を罰した家光の許に沢庵を連れて行ったのである。だが、沢庵と逢った家光は直に沢庵が気に入り、やがて天海同様沢庵を優遇し、後に品川の東海寺を建てて開山に迎えた。今は省略するが、天海と沢庵の親交は深く、この二人に対する家光の傾倒は度を越したものであった。

一方、天海は寛永寺の創建に当って幕閣（秀忠、家光は別）と鋭く対立した。幕閣は増上寺を例として、天海建立の寺も徳川家だけの寺にするようにと再三に亘って要求した。だが、天海は寺というものは本来庶民（誰でも）が自由に参詣できるべきものだと主張、将軍などが訪れる日は別として、それ以外は開放すべきだとして頑として譲らなかった。

その上、天海は中世以来流行していた見立の構想（例えば中国の瀟湘八景→近江八景）を用い、比叡山に因んで山城と近江の名所を上野に写したのである。当時、江戸の庶民はこれらの名所の名は知っていても訪ねることは出来なかったのである。琵琶湖の竹生島の宝厳寺の弁天様を不忍池に祀り、東山の方広寺の大佛を精養軒前の丘に、八坂の祇園様を精養軒の地に、清水寺の観音様を崖地に櫓を組んで祀った。庶民は嬉こんだが幕閣は激怒、以後一切の援助を打切り、それは元禄十一（一六九八）年迄続いた。

猶、天海はこの時同時に所謂環境整備も行った。紅白の蓮、櫻、紅葉、赤松、梅、寒椿などを植え、上野を四季遊楽の地にしたのである。今の上野は正に天海の構想したことの名残なのである。

能登半島――被災文化財に想いを寄せて

悪夢としか思えない元旦の悲劇。甚大な被害をもたらした能登の大地震。発足した「文化財サポーターズ」の第一回支援は能登の被災文化財に決定したが……。

文化庁文化資源活用課
課長補佐心得
髙橋 浩佳（たかはし・ひろか）

1 能登半島地震による文化財の被害の状況

まずは、九月下旬に発生した奥能登豪雨による被害に遭われた皆さまに、心より御見舞いを申し上げます。元旦に発生した能登半島地震から約九か月が経ち、復興に向けて歩みを進める最中の出来事であり、被災地の方々のことを思うと本当に心が痛みます。文化財についても、能登半島地震による被災に加え、今回の豪雨による土砂の流入等の被害を受けたところもあります。能登地方に所在する豊富な文化財を守り、後世に伝えていくためにも、オールジャパンで能登地方の復興に向けて行動していくことが求められています。

能登半島地震では、文化財についても各地で大きな被害が発生しました。国として把握している文化財の主な被害状況は、国宝・重要文化財（建造物）が58件、登録有形文化財（建造物）が184件、その他国指定等文化財が64件、地方指定・登録文化財が121件の合計427件に上ります。

被害の具体的な例をいくつか挙げてみます。まず、石川県内の国指定重要文化財（建造物）から見てみると、伝統的建造物群保存地区である輪島市黒島地区にある旧角海家住宅では、主屋が倒壊したほか、蔵が傾き、壁が崩落しました。同じく輪島市にある上時国家住宅も、主屋が倒壊し、米蔵の壁が半分以上崩落しました。時国家住宅は、過去の耐震対策によって倒壊こそ免れたものの、主屋内部の土壁の崩落や軸部の傾斜が生じました。上時国家住宅・時国家住宅は、豪雨による被害も受けています。能登町にある中谷家住宅では、主屋内部の土壁や建具等の破損、通用門の倒壊などの被害が、金沢城では、石垣の崩落や漆喰壁の剥落などの被害も出ました。国登録有形文化財（建造物）の被害も大きく、輪島市の總持寺祖院では複数の建物が倒壊、七尾市の高澤ろうそく店主屋は下屋倒壊、などといった状況です。また、被害は石川県だけではなく、例えば富山県では、瑞龍寺や勝興寺（共に国宝・国指定重要文化財）においても、漆喰壁のひび割れや落下、柱の傾斜等といった被害が出ています。

2 復旧・復興に向けて

こうした被害を受け、文化庁では、（独）国立文化財機構文化財防災センターと連携して、建造物の応急措置に関する技術的支援を行う文化財ドクター派遣事業、及び美術工芸品等の破棄・散逸を防ぐための支援を行う文化財レスキュー事業を実施しています。これまで、ドクター事業は244棟（目視を含めると1、640棟）、レスキュー事業は181か所で実施してきました。また、国指定等文化財について、本格復旧に向けた早期の財政支援を見据えて、98か所に文化庁の専門調査員を派遣し、被災文化財の所有者等と詳細な被害状況の確認や復旧に必要な事業費の見積もり等の相談を実施してきました。そして、準備の整ったものから、国庫補助における補助率を20％嵩上げ（最大85％）する災害復旧事業として財政支援を行っています。

地震によって大きな被害を受けた「輪島塗」については、石川県立輪島漆芸研修所や輪島塗技術保存会に対し、事業の再開等に必要となる経費について支援を実施してきました。石川県立輪島漆芸研修所は、十月七日から授業等を再開しています。

このように、国としては、被災文化財の本格復旧に向けた取組について、地域に寄り添いながら、着実に進めているところです。

3 一人ひとりができること ―被災文化財に想いを寄せて―

「絲綢之路」2024年夏号でも特集いただいていましたが、今年の三月から、文化庁は、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団、株式会社博報堂、READYFOR株式会社との官民共創による寄附促進事業「文化財サポーターズ」を立ち上げました。その助成事業の第一弾として、現在、「令和六年能登半島地震文化財復興緊急支援事業」を行っています。三月から六月にかけて行ったクラウドファンディング、及びそれと並行して募集していた郵便振替・銀行振込による運営事務局（財団）への直接寄附においては、多くの皆さまに温かい御支援をいただきました。本事業の担当として、この場をお借りして、改めて心より御礼申し上げます。

本事業は、この記事を執筆している現在、具体的な支援プロジェクトの決定に向けて動いています。「寄附をゴールとするのではなく、個人・企業が文化財との新たなつながりを持つことをきっかけとすることを目指す」という文化財サポーターズの趣旨にも鑑み、「修理・修繕して終わり」ではなく、被災文化財の魅力をより一層伝える工夫をすることによって、人々に被災文化財に想いを寄せてもらい、応援し続けてもらうきっかけとなるような取組を支援したいと思っています。

支援プロジェクトが決定した後には、対象文化財の所有者の皆さんと運営事務局が協働して、再度、ファンドレイジング（資金調達）を行うことを予定しています。ファンドレイジングは、お金を集める手段と思われがちですが、それ以上に、「共感した人が集まる」という効果が見込まれます。復興は、長い道のりであることが想定されるからこそ、「共感した人」を集め、継続的な文化財の支え手＝サポーターになってもらう、そうした手助けがこの事業を通じてできれば良いなというのが、事業担当としての思いです。

文化・文化財は、地域のアイデンティティであり、人々の心の拠り所となるものです。震災からの復興に当たっては、文化財の復旧が欠かせないと私は思っています。そして、社会が、一人ひとりが、被災地に想いを寄せ続け、ささやかながらでも応援し続けることがとても大切だと思います。財団会員の皆様におかれましても、引き続き、被災地に、そして被災文化財に対して、温かい御支援をお寄せいただけますと幸いです。

上時国家住宅：主屋倒壊

旧角海家住宅：主屋倒壊

中谷家住宅通用門：倒壊

時国家住宅主屋内部：土壁崩落

高澤ろうそく店主屋：下屋倒壊

總持寺祖院：複数棟倒壊

※本文中の数字は全て令和6年9月25日時点のものです。

私たちがクラウドファンディングで得たもの

人々の善意と期待。科博は所蔵する「地球の宝」を守るために、どう行動したのか。その全報告。

国立科学博物館長
篠田 謙一（しのだ・けんいち）

なぜクラウドファンディングが必要だったのか

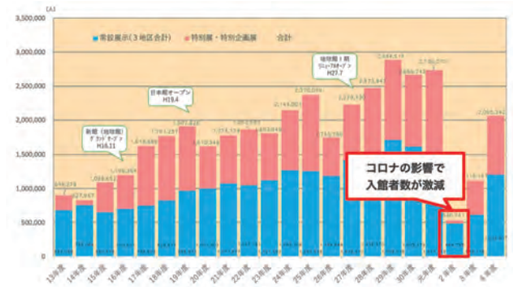
既に多くの人の知るところだとは思うが、一年前の夏、国立科学博物館は、過去最大規模となる目標金額一億円のクラウドファンディング（クラファン）を実施した。これは、当館の使命である「標本・資料の収集・保管」のための活動が、コロナ禍による入館料収入の減少や光熱費の高騰等により、資金的に大きな危機に晒されたことによるものだった。そのため、実施に当たっては、通常は特定のプロジェクトを支援するために行われるクラファンとは異なる「地球の宝を守れ」というスローガンを掲げることになった。ちなみに、ここで言う「地球の宝」とは、科博が収蔵・保管する資料を指している。科博の本来の業務を支援するためのクラファンを意図したのである。

2023.8.7　クラウドファンディングの記者発表会

そういう事情もあり、当初は成功を危ぶむ声もあったが、二〇二三年八月七日の午前九時にクラファン開始を伝える記者会見を始めた直後から寄付が集まり始め、昼のテレビニュースで取り上げられたとたんに運営会社のサーバーがダウンするほどアクセスが集中した。目標とした一億円の寄付を九時間で達成し、最終的に三ヵ月間で九億二千万円あまりを集めたことは、日本のクラファン史上でも語り継がれる成功例となった。寄せられた寄付額の大きさが注目される科博のクラファンだが、私たちにとっては、これも史上最大となる五万六千人もの支援者を集めたことに大きな意味があったと考えている。

減少する運営費交付金と増加する運営費

科博は「国立」という名称が付いているが、二〇〇一年から独立行政法人（独法）に移行しており、長期で見ると国からの運営費交付金は徐々に減少している。これまではその削減分を、入館者数を増やし、入館料収入を上げることで相殺しており、二〇一九年の段階では国からの運営費交付金が八割、入館料などの外部資金が二割で運営していた。そんな中、コロナ禍が本格的に始まった二〇二〇年度は、来館者が前年の二割まで落ち込み、入館料収入も八割減となった。その後は綱渡りの経営を続けていたが、一方で二〇二二年度には来館者も八割程度まで戻り、やや明るさが見えていた。しかし今度はロシアによるウクライナへの侵攻が起きたことで、エネルギー価格の高騰で光熱費が倍近くまで膨らむことが予想される事態となった。



入館（園）者数の推移

年度の途中には、運営のための資金が足りなくなると考えられたので、他の博物館と歩調を合わせて、国に補正予算での光熱費高騰分の補填をお願いした。しかし残念ながらそれが叶うことはなく、十二月の段階で、翌年三月には予算不足に陥ることが確実となった。そのため、この時点で未執行だった研究費や事業費を可能な限り引き上げて急場を凌ぐことになった。

同じく十二月には翌年度の国からの運営費交付金の額が示されたが、それでは高止まりしている光熱費や強まるインフレの傾向などを考えると、再び予算不足の危機になることが必至だった。そこで一月には不足分の資金の補填は「クラウドファンディングで埋めるしかない」と決意し、関係省庁との打ち合わせやクラファンを担う企業を公募する準備を始めた。また年度初めの四月三日には、全職員に向けて、クラファンの実施に協力を促す内容のメールを送り、そこから本格的にプロジェクトがスタートすることになった。

すべてが「走りながら考える」だった

クラファンはリターンと呼ばれるさまざまな返礼品を準備する必要があるので、時間をかけて制度設計をする必要がある。五月に始めたクラファンの実施企業との話し合いの中で、返礼品の準備などに充分な時間をとった場合には、開始できるのは十一月、急いでも九月スタートと言われたが、昨年度の情況を考えると、それでは今年度の運営資金の補填にはならないので、早ければ夏休み前の七月、遅くとも八月に始めることを決めた。しかしそのため、多くのことが「走りながら考える」かたちになり、関係者にかなりの無理を強いることにもなった。

なお、募集の金額を一億円としたのは、これくらいが精一杯という判断からだったが、実際にはその倍くらいの資金が必要だった。しかし、この額であっても「目標は高すぎる、集まらなかったらどうするのか」という心配の声が出ていた。クラファンで集めることのできた金額は、ある意味、実施した組織の価値を可視化することにもなる。失敗は許されないが、後にも引けないという状況だったので、クラファンの初日に目標を達成したときには嬉しいというよりはホッとしたのを憶えている。

科博に親しむ。社会との交流

結果的には、目標金額の九倍を超える金額が集まったわけで、私たちの見込みは大きく外れることになった。しかし、ここまで予想を外すと、私たち自身に何か問題があったと考えなければならないだろう。後でふり返ってみると、このような乖離の原因は、私たちにクラファンという仕組み自体が、それほど大きな額を集めるものではないと言う思い込みがあったということ、それにプラスして、博物館としての自己肯定感が低かったことが挙げられると思う。

クラファンから得た教訓

クラファンでは、寄付と同時に支援者からの応援メッセージも送られてくるが、それには大きく二つの傾向があった。ひとつは、「地球の宝を守れ」という理念に賛同したもの、もうひとつは、科博の展示を親子三世代で見に来てくださっている方など、これまで当館に来館したことのある人々からの声だった。それは一四五年余りに渡る当館の歴史そのものを評価したもので、たいへんに嬉しく思っている。

一過性の財政危機を乗り越えるために実施したクラファンだったが、私たちは今回の活動を通して、社会における科博が持つ重要性、多くの人々の期待について改めて気がつくことになった。それは今後の科博の活動、とりわけ「地球の宝」を守っていくための何よりのモティベーションになる。冒頭で、多くの人々が科博を支援してくれたことがわかったことが重要だったと書いた。繰り返しになるが、それこそが今回のクラファンの最大の成果だったのだと思っている。

筑波研究施設（茨城県つくば市）にある収蔵庫の様子

ヨーロッパ演奏紀行

ドイツ――古き友との旧交をあたためる。
イギリス――恩師との再会。
デンマーク――白夜の中の演奏会。
コロナ禍後のヨーロッパの音楽事情は……。

財団理事長
澤 和樹
（さわ・かずき）

名門ファミリーとの邂逅

ヘンシェル・カルテットは、今年結成三十周年を迎えたドイツを代表する弦楽四重奏団です。もともとは、第一ヴァイオリンのクリストフ、第二ヴァイオリンのマルクスの双子の兄弟、そして彼らのお姉さんのモニカ・ヘンシェルがヴィオラを担当、その三姉弟にチェリストが加わる形で、一九九〇年頃から活動を始めていました。彼らの父親は、シュトゥットガルト歌劇場管弦楽団の首席ヴィオラ奏者、母親はピアニストという家庭で、家には伝説的名指揮者のセルジュ・チェリビダッケや、二十世紀最高のアンサンブルとも言われるアマデウス弦楽四重奏団のメンバーがしばしば遊びに来ると言うような環境で幼少期を過ごしたようで、ヘンシェル・ファミリーで弦楽四重奏に取り組むのはごく自然な成り行きでした。一九九一年夏、結成したばかりの澤クワルテットが、ロンドンのアマデウス弦楽四重奏団メンバーによる講習会（アマデウス・コース）に参加した時に、まだ二十代前半だったヘンシェル・カルテットと出会いました。参加者の中でも一番若いグループだった彼らは、演奏でも抜群の存在感で輝いていました。モニカさんは、往年の映画スター、イングリッド・バーグマンの若き日を彷彿とさせる知的美人でもあり、翌年に富士山麓の精進湖畔のホテルで開催することになったアマデウス・コースに招待受講生として、下心一〇〇パーセント（?）で誘い、彼らの初来日が実現しました。それ以来、ホストファミリーにもすっかり気に入られた彼らは、毎年のように来日して各地で演奏。澤クワルテットやピアノの蓼沼恵美子との共演も日本とドイツ、オーストリアなどで数えきれないほどです。一九九四年に、現在のチェリスト、マティアス・バイヤー＝カルツホイが定着した時から早くも三十年が経過しました。一九九六年には大阪国際室内楽コンクールで見事に優勝し、彼らにとっても日本とのご縁はとても大切なものとなりました。今年の六月末から七月にかけて、彼らは結成三十周年記念のコンサートツアーに私と蓼沼を招待してくれ、ドイツとデンマークで数回の思い出深い共演をして参りました。

木組みの民家や店舗が並ぶゼーリンゲンシュタットのメルヘンチックな街並み。

ホテルの前庭の露天パブで演奏後の打ち上げ。正面中央がモニカさん。
右端は妻の蓼沼恵美子

予期せぬ演奏会への出演

六月二十四日の夕刻にフランクフルト空港に降り立ちました。コロナ禍を挟んで六年ぶりに訪れたヨーロッパ。やはり空気が違います。とりわけ雲一つない快晴にも恵まれ、濃く青い空は、日本ではなかなか見られないものです。空港で出迎えてくれたモニカの運転でアウトバーンを東に三十分ほどのゼーリンゲンシュタットに着きました。ゼーリンゲンシュタットは、マイン川に面し、バイエルン州とヘッセン州の境にある人口二万人ほどの小さな街ですが、木組みの可愛らしい家や店舗が立ち並ぶメルヘンチックな雰囲気です。到着してヘンシェル・カルテットのメンバーと、白ビールで乾杯して再会を喜び合いました。ただ、第一ヴァイオリンのクリストフが二週間ほど前に左薬指の「バネ指」の手術を受け、経過が思わしくなく、やむなく、ゼーリンゲンシュタットでの三回の演奏会をキャンセル。本来、第二ヴァイオリンを弾く予定だったダニエル・ベルが急遽、第一ヴァイオリンを担当、私も、当初、予定していなかった弦楽六重奏での第一ヴァイオリンを担当するなど、早速に予期せぬ事態となりました。この音楽祭では、ヘンシェル以外にも、ベルリンを拠点に活躍するフォグラー・カルテットのメンバーとの共演もあり、リハーサルや演奏会の終了後は、ホテルの前にパラソルで張り出したオープンエアーでビールやワイン片手に、時差ボケの睡魔と戦いながらも、夜遅くまで語らいました。四日間のゼーリンゲンシュタット滞在中には、フランクフルトやミュンヘンから、藝大時代の澤クラスの卒業生が何人か訪ねてきてくれました。みんな、ミュンヘン・フィルはじめ、ドイツの有力なオーケストラのメンバーとして活躍していて、とても誇らしい思いです。

手術後の左手不調のクリストフに替わって急遽、代役で弦楽六重奏の第1ヴァイオリンを務める。ゼーリンゲンシュタットの城の中庭での演奏。

留学時代の恩師、ジョージ・パウク夫妻もデュオ・リサイタルに駆けつけてくださった。

思い出深きロンドン。そして再びドイツへ

六月二十九日からは、留学で四年あまりを過ごしたロンドンを訪れました。六月三十日には、ロンドン中心部、ソーホー地区にあるヤマハ・ミュージック・ロンドンで日英音楽協会主催でデュオリサイタルを開催していただきました。風格ある天井の高い立派なサロンで、留学時代の恩師、ジョージ・パウク夫妻にも主賓としてご出席いただき、また日本大使館からも文化担当の皆様方が出席してくださいました。七月二日には再びドイツに戻り、ミュンヘン空港からザルツブルク方面に向かったキーム湖の近くの高台にあるヴィラ・ザヴァリッシュを訪れました。NHK交響楽団の桂冠名誉指揮者として日本でも大変人気のあったヴォルフガング・ザヴァリッシュが後半生を過ごしたところで、現在は記念館としてザヴァリッシュの残した楽譜や書籍、美術品のコレクションなどが展示され、音楽会や音楽講習会が行われています。ここでも三日間滞在し、ようやく復帰したクリストフ・ヘンシェルも加わって演奏を行いました。ここではミュンヘンをベースに活躍するチェリストのクレメンス・ヴァイゲルと初共演し、意気投合しました。

北欧の凛とした涼しき空気の中で

七月五日からは、ヘンシェル・カルテットのチェリスト、マティアスが音楽監督を務めるデンマークのHICSUM（ヒクサム）音楽祭に参加しました。首都コペンハーゲンから車で約一時間の移動でしたが、見渡す限りの平原とすぐ近くの海。なんと国内最高峰が海抜百七十三メートルだそうで、国民の間では、「このまま温暖化が進んで北極の氷が解けると国土の大半が無くなる！」と本気で心配しているのだとか…。ヒクサムでの演奏は、古い修道院だった建物の中で行われ、駐デンマークの宇山秀樹大使ご夫妻も、聴きに来てくださいました。西洋クラシックとともに武満　徹の「十一月の霧と菊の彼方から」という曲や滝廉太郎の「荒城の月」、岡野貞一の「故郷」、山田耕筰の「からたちの花」などをヴァイオリンとピアノで演奏しましたが、デンマークの年配の方々から、日本の唱歌に対して「懐かしい友人に会ったような気がした」と言ってもらえたのは、大変うれしかったです。演奏会が夜十時に終わり、ワインで乾杯した後でも北欧での薄明るく澄んだ空は、七月上旬でも肌寒いほどの凛とした涼しさとともに、忘れることが出来ません。ヘンシェルたちとの三十年にわたる音楽を通じた友情は、さらに年を重ねて深まってゆくことでしょう。

今回のツアーの最終日、デンマークのHICSUMでの演奏を終えて。

シルクロードを掘る
――バーミヤーンからスイヤブへ

多くの謎とロマンを秘めたシルクロードの遺跡。その発掘調査と保護に筆者が身を投じることを決意したきっかけは、あのバーミヤーンの悲劇だった……。

帝京大学文化財研究所
教授・所長
山内 和也
（やまうち・かずや）

私の人生を変えた衝撃の事件

二〇〇一年三月に起こったアフガニスタンのバーミヤーン大仏の爆破は、その当時、国際社会に大きな衝撃を与えました。それからすでに二十三年余の月日が経ち、若い世代の人たちにとっては教科書に登場するたんなる一つの事件にしか過ぎないかもしれませんが、私にとってはその後の人生を変える大きな出来事となりました。

この衝撃的な事件が起こった当時、私はイランのテヘラン大学留学を終え、平山郁夫シルクロード研究所の研究員として働いていました。この事件からしばらく経った頃、平山先生にアトリエに呼ばれ、「アフガニスタンのカーブルでアフガニスタンの文化遺産復興に関する国際会議があるので一緒に来てください」と告げられました。私が留学していたイランはアフガニスタンの西側に位置する、まさに隣りの国でしたが、それまでの私とアフガニスタンの接点といえば、テヘランの建築現場で働くアフガニスタン難民の人たち、そして同じくテヘラン大学に留学し、大学の寮でともに暮らしたアフガニスタンのバーミヤーンから来た二人の学生ぐらいのものでした。後日談ですが、私がバーミヤーンで活動するようになってのち、地元の人たちにその二人のことを尋ねてみましたが、一向に二人の消息は分からずじまいでした。

バーミヤーン、爆破された西大仏

二十年以上続いた戦禍のなかで命を落としてしまったのかもしれません。

二〇〇二年五月、平山先生と一緒にアフガニスタンのカーブル空港に降り立ち、街に入った私は、まるでアニメ『進撃の巨人』の一コマのような衝撃的な光景を目の当たりにしました。あたり一面、建物は崩壊し、瓦礫の山が広がっていました。このような光景を前にし、文化遺産の復興は可能なのかという考えが頭をよぎりましたが、この時に開催された「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」を契機とし、日本がバーミヤーンの文化遺産の保護に積極的に関与することになりました。それ以来、現在に至るまで、日本政府によるバーミヤーン文化遺産の保護への協力が続いており、私自身もその一員として活動しています。

玄奘に導かれてシルクロードの地へ

バーミヤーンでの活動は多岐にわたりましたが、その一つが考古学調査でした。この時、私たちの調査と研究の道標となったのが、玄奘が残した『大唐西遊記』という書物です。六二九年に唐の長安を出発した玄奘は、シルクロードを西へと辿り、六三〇年にこのバーミヤーンを訪れました。バーミヤーンの国情や地形、人びとの暮らしぶりのみならず、爆破された東西二体の大仏、そしていまだ見つかっていない「千余尺の涅槃仏」について記しています。以来、『大唐西遊記』は、ある意味、私の「座右の書」となり、この本が私をキルギス共和国のアク・ベシム遺跡へと導いてくれることになりました。

バーミヤーンが足掛かりとなり、私の活動の舞台はシルクロードへと大きく広がっていきました。インドやイラン、中央アジア諸国（カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン）といったアフガニスタンの周辺の国々のみならず、コーカサスのアルメニアとジョージア、中国といった国々でも文化遺産保護の分野における国際協力を実施してきました。またあわせて、シルクロードのユネスコ世界遺産への登録のための支援も行い、その活動はシルクロードの世界登録という形で実を結びました。こうした活動の過程で発掘調査の舞台に選んだのが、キルギス共和国北部に位置するアク・ベシム遺跡です。

アク・ベシム遺跡はかつてスイヤブと呼ばれた都市遺跡で、六世紀から十世紀にかけてシルクロードの国際交易都市として繁栄しました。二〇一四年には「シルクロード：長安―天山回廊の交易路網」の構成資産の一つとしてユネスコ世界遺産に登録されています。玄奘は六三〇年にこのスイヤブを訪れ、貴重な記録を残しています。これが、私がこの遺跡を選ぶ大きな理由の一つでもありました。

アク・ベシム遺跡で見つかった花柄の石のモザイク

アク・ベシム遺跡（スイヤブ）、ソグド人の街の調査

さらに広がるシルクロード・ロマン

現在、アク・ベシム遺跡という名で知られているこの都市遺跡は、かつてはスイヤブと呼ばれ、漢文史料では砕葉、素葉、素葉水などの名称で記録されています。この遺跡の特徴は、文化が異なる二つの街、つまり西方世界と東方世界の街が隣り合って存在していることにあります。もともとは六世紀頃に東方への進出拠点の一つとしてソグド人によって建設されたものでしたが、七世紀の後半には唐王朝によってこの街に隣り合うように軍事拠点である砕葉鎮城が建設されました。その意味では、七世紀後半、この地は東西世界の接点でした。さらには、この遺跡では、仏教、キリスト教、ゾロアスター教の痕跡も見つかっています。この遺跡から見つかっている証拠は、さまざまな民族や宗教が共生・共存する場所であったことを示しており、まさにシルクロードの国際交易都市と呼ぶにふさわしい遺跡です。

二〇一三年から調査は始まっていますが、本格的な発掘調査が開始されたのは二〇一六年のことです。それ以来、唐王朝の軍事拠点である砕葉鎮城や東方キリスト教会などで発掘調査が進められており、これまで知られていなかったさまざまな事実が明らかとなりつつあります。これからの調査次第では、教科書を書き換えるような発見も夢ではないかもしれません。

多くの日本人にとってのシルクロードは、東アジアの端にある日本から見える西方の世界なのかもしれません。その一方で、私にとってのシルクロード研究、あるいはシルクロードとは、若い頃に留学したイラン世界、あるいはシルクロードへと活動を広げるきっかけとなったアフガニスタンから見る東方の世界であり、さらには日本へと戻る「道」であるように感じています。

バーミヤーン、シャフリ・ゴルゴラから街を望む。後列右から２番目筆者

筆者略歴

一九六一年福島県生まれ。一九八四年早稲田大学第一文学部卒業。一九八八年早稲田大学大学院文学研究科修了。一九九二年テヘラン大学人文学部大学院（古代イラン文化・言語学科）修了。平山郁夫シルクロード研究所研究員、東京文化財研究所地域環境研究室長を経て、二〇一六年より帝京大学文化財研究所教授。二〇二二年四月より同研究所長。専門はシルクロードの考古学、歴史、文化。

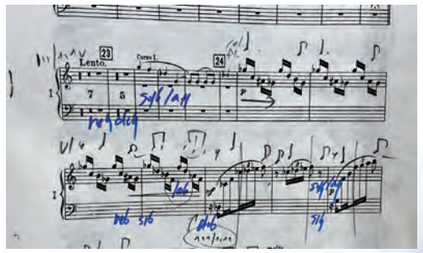
秋の夜長はハープと共に……。ハープとの出会い。そして今。

ハープは長い歴史をもつ楽器です。古代の人々がその音色に魅了されたように今も名手の奏でる曲に人々は癒されます。そのハープの素顔にせまってみましょう。

東京藝術大学音楽学部
非常勤講師
高野 麗音（たかの・れいね）

今回は、そのオーケストラのお仕事の流れをご紹介します。

まず一番最初にすることは、もちろん譜読み。一カ月ほど前に、あらかじめ送っていただいた楽譜を見ながら、いつペダルをチェンジするか、そしてリハーサルで曲の途中から始めることを指示された場合、どのようなペダル設定で始めれば良いか（これを怠ると、周りの方をいちいちお待たせしてしまったり、始める時の設定を間違えて、違う音を出してしまう、ということになります）を、細かく書き込みます。これがなかなか時間と根気のいる作業。ド♯をレ♭などの異名同音で代用することもできますので、うまく読み替えると大幅にペダルチェンジを減らせることもあり、パズルのような側面のペダルがドレミファソラシドの七つの音にそれぞれ対応し、三段階のギアのように切り替えられるようになっています。例えばソのペダルを上にすると、楽器全体のソの音がフラットに。真ん中にするとナチュラル、一番下にするとシャープ、と随時踏み換えながら演奏します。これによって四十七本の弦でも八十八鍵のピアノとほぼ同じという広い音域を獲得した楽器です。



青いマーカーで書き込んでいるのがペダルチェンジの工程

弦の張力はおそらく皆さんが想像されるよりも強く、撥弦楽器の中では一番弦が固いのではないかと思います。これを爪やピックではなく指の腹で直接弾きますので、楽器を始めたばかりで皮膚が薄い頃は水膨れになったり、痛く感じることも。一定期間して厚い皮膚が出来上がると痛くはありませんが、旅行などに行って数日弾かなかった後にはまた痛く感じることも…。

演奏前の準備と緊張

私は年間百本近くの公演に出演しますが、その八割はオーケストラでのお仕事。残り二割がソロでの演奏や、小編成の室内楽という感じです。

ハープという楽器

四十七本の弦と七本のペダルを持つ、高さ百八十センチ、重さは四十キロほどの巨大弦楽器、それが私が弾いているグランドハープという楽器です。このペダルがこの楽器の一番の特徴であり、難しさと言っても過言ではありません。

7本のペダル

弦はドレミファソラシドの順番で並んでいて、ド♯、ファ♯というような、ピアノでいう黒鍵の音が無い状態です。黒鍵の音が欲しい場合はどうするのかと言いますと、七本もあります。

ペダルが整ったら、今度は指遣い、右手と左手どちらでどの音を弾くかを考え、これも書き込みます。低音域を左手、高音域を右手で演奏するのは基本的にピアノと同じなのですが、ハープは楽器の両側からそれぞれの手で撥弦することになりますので、同じ音域を両手で分担しながら弾くことも、左手の方が右手より高い音域を弾くことも容易です。このおかげで、同じパッセージを弾くにも何通りもの指遣いが存在し、自分やその曲のリズム感に一番しっくりくる弾きやすい指遣いを探します。これまたパズル感のある作業。オーケストラの場合は、なるべく手元を見ずに、指揮者を見ながら弾ける指遣いを選んだりもします。

いつも持ち歩いている道具たち

こうして書き込みを完成させた楽譜を持ってリハーサルへ。この時持って行くものは、チューニングの道具、本番用の靴（大抵のハーピストはペダル操作の都合上、いつも同じ靴で演奏することを好みます）、楽譜のみ。楽器は自分のものではなく、オーケストラの所有しているものか、オーケストラの楽器がない場合は、レンタル業者さんが持ってきてくださるハープを使用しますので、他の楽器の方よりは少し身軽です。

私は基本的には一時間前くらいに会場に到着して、十五分くらいかけて四十七本の弦をチューニング、十五分くらいかけてウォーミングアップ、その後曲の練習を少しして、余裕があればコーヒーを飲んだりします。弦は気候条件などで、弾いていなくてもいつの間にか切れていることもありますので、会場に着いて最初にする作業が切れた弦の張り替えになることもありますので、その時間も見越して行動しています。その後は、一時間ごとに入る休憩時間の度にチューニングを手直し。演奏会の日も、開場してから舞台上でチューニングや練習をしてそのまま演奏会に突入、前半後の休憩時間でまたチューニングして後半の演奏、とずっと舞台上にいます。

私は地方都市に複数日滞在してのお仕事が多く、リハーサルが終わってしまうと、もう楽器を触ることがあまりできません。持ち運べる楽器ですと、スタジオやカラオケなどで練習したりしている方もいらっしゃいますが、ハープがあるスタジオはなかなか存在しません。音源を聴いたり、楽器が無くてもできる勉強をしたりすることはもちろんありますが、ある程度の時間からは「だってもう今日は、どうしても練習できないのですから」と罪悪感もなく、その土地の美味しい食べ物とお酒を楽しむのが、大事な趣味でありストレス対策となっています。

演奏する筆者

演奏者としての願い

もう一つ、最後に私とハープの出会いについてお話しします。ピアニストの母を持ち、幼児の頃からピアノを教わっていた私ですが、六歳の時に近所の市民会館で、偉大なハーピスト吉野直子さんのリサイタルを聴き、音と楽器の形の美しさに釘付けになり、両親に頼み込んでその数年後に習い初めました。ハープは運搬費などが嵩（かさ）むこともあり、なかなか身近でお聴きいただく機会は少ないとは思いますが、オーケストラの中だけで無く、ソロ楽器としてゆっくり聴いていただくのも面白い楽器です。もっとハープの演奏会の機会が増えて、皆様にハープの楽しさを知っていただき、私のように偶然にハープに出会い、弾いてみたいと思ってくれる子供達（もちろん大人の方も！）も増えれば良いなと願っています。ハープの演奏会の案内をご覧になった時は、是非一度足をお運びいただければ嬉しいです。

筆者略歴

東京藝術大学附属音楽高等学校、東京藝術大学音楽学部を経て二〇一〇年パリ国立高等音楽院修士課程を首席で修了。二〇〇六年以降四年間ロームミュージックファンデーションの奨学金を得る。

ソリストとしての活動をはじめ、室内楽やオーケストラ、新曲の発表などに積極的に参加。これまでに景山真菜、木村茉莉、渡邊萬里、イザベル・モレッティの各氏に師事。

広島交響楽団、群馬交響楽団、札幌交響楽団と共演。現在、東京藝術大学音楽学部、札幌大谷大学非常勤講師。

役員等のご紹介

当財団の役員等を左記のとおりご紹介します。

令和六年十月現在　敬称略／五十音順

◎理　事（九名）

理事長
澤　和樹　東京藝術大学　名誉教授・顧問

副理事長
籔内佐斗司　東京藝術大学　名誉教授

専務理事
小宮　浩　当財団　専務理事

理事
石井　直（株）電通　相談役
伊東信一郎　ＡＮＡホールディングス（株）特別顧問
滝　久雄（株）ＮＫＢ・（株）ぐるなび取締役会長・創業者
谷川　史郎（公財）日本交通文化協会　理事長
西浦　忠輝（特非）文化財保存支援機構副理事長
渡邊　健二　東京藝術大学　名誉教授

◎監　事（二名）
西巻　茂　税理士
横田　尤孝　弁護士

◎評議員（十九名）
浅見　龍介　東京国立博物館　副館長
有吉　伸人（株）ＮＨＫエンタープライズ代表取締役社長
浦井　正明　寛永寺　住職
大杉　栄嗣　大塚オーミ陶業（株）代表取締役社長
是枝　伸彦（株）ミロク情報サービス代表取締役会長
定方　郷（株）精養軒　代表取締役社長
佐藤　一郎　東北生活文化大学　学長
白井　勝也（株）ヒーローズ　代表取締役社長
高橋　明也　東京都美術館　館長
高橋　司（公財）鹿島美術財団代表理事専務理事
太刀川俊明（株）三越伊勢丹　美術営業部長
永井　浩二　野村ホールディングス（株）野村證券（株）取締役会長
長井　大地　読売新聞東京本社　事業局事業戦略センター長
長本　裕司（株）髙島屋　ＭＤ本部　美術部長
野間　省伸（株）講談社　代表取締役社長
日比野克彦　東京藝術大学　学長
福田　豊　恩賜上野動物園　園長
堀越　礼子（株）朝日新聞社　取締役　西日本統括／大阪本社代表　文化事業エグゼクティブプロデューサー
門司健次郎　クラマスター協会　名誉会長（一財）外務精励会　会長

◎顧　問（一名）
宮廻　正明　東京藝術大学　名誉教授

賛助会員ご入会とご寄付を頂きました皆様

◎令和6年6月1日から9月30日まで　敬称略／順不同

☆賛助会員
○個人（正）会員

☆寄付金
○文化財保存修復・芸術研究等助成事業に対する寄付
ヤフーネット募金（109名様）
妻田薬師保存会
（宗）花蔵院
（宗）極楽寺
○尼門跡寺院文化財修復助成事業に対する寄付
月山日本刀鍛錬道場
西陣織工業組合
（公財）野村文華財団
（公財）日本美術刀剣保存協会
（公社）能楽協会
（学）二本松学院
（学）作新学院
（株）大垣書店
（株）福寿園
（一社）日洋会
ＮＰＯ法人　ゼファー池袋まちづくり願成寺
正善寺
大興寺
クラウドファンディング（120名様）

お願い

○昭憲皇太后大礼服研究修復復元支援事業のための募金のお願い

大聖寺門跡所蔵の昭憲皇太后大礼服は、明治時代の西欧化、社会変化、殖産興業などを表象する大礼服であり、現存する最古の昭憲皇太后所用の第一礼装です。貴重な歴史資料であり、近代日本の象徴的遺産として文化財的価値が高いものです。

経年劣化著しい大礼服の修復、欠失している部分（スカート）の復元のため、令和元年度から令和六年度まで募金を行い昭憲皇太后大礼服の研究・修復・復元事業を実施しております。

＊

募金のお振込み手続きは左記の銀行振込又は郵便振替によりお願い申し上げます。
※郵便振替の場合、通信欄に「大礼服」とお書き下さい。

＊

銀行振込（①銀行名②口座番号③名義）
①三井住友銀行　上野支店
②普通　６６１５５００
③（公財）文化財保護・芸術研究助成財団
※銀行振込の場合、振込者の確認が難しいため、領収書、お礼状の発行等の必要上、財団事務局に事前にご連絡をいただけると幸いです。
（電話：〇三・五六八五・二三二一）

郵便振替（①振替番号②加入者名）
①００１６０・５・１２３１９
②（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

◎賛助会員ご入会並びにご寄付（前記のご寄付を除く）のお願い

《賛助会員》
当財団では、財団の活動趣旨にご理解、ご賛同いただき、恒常的にご支援いただける法人、個人の賛助会員を募集しています。

法人正会員　年額（1口）　50万円
個人正会員　年額（1口）　1万円
維持会員　年額（1口）　10万円

《ご寄付》
賛助会員の他に、ご寄付も随時受け付けております。ご寄付の方法は様々な方法がありますので、左記のとおりご紹介します。詳細は当財団事務局までお問い合わせ下さい。
（電話：〇三・五六八五・二三二一）

⑴銀行振込又は郵便振替
銀行振込や郵便振替でもご寄付を受け付けております。

（銀行振込）
○三井住友銀行　上野支店
普通　６６１５５００
○みずほ銀行　上野支店
普通　４４７８５７６
○三菱ＵＦＪ銀行　上野中央支店
普通　０７９６３８４

（郵便振替）
００１６０・５・１２３１９
※口座名義は、銀行、郵便局、いずれも（公財）文化財保護・芸術研究助成財団
※銀行振込の場合、振込者の確認が難しいため、財団事務局に事前にご連絡をいただけると幸いです。

⑵インターネットによるご寄付
次の手順によりインターネットから、クレジットカード又はＶポイントによるご寄付（募金）を受け付けています。
←○「ＹＡＨＯＯ！ＪＡＰＡＮネット募金」
←○「文化・スポーツ」
←○「文化財保存修復支援募金」
←○「クレジットカード」又は「Ｖポイント」を選択
←○募　金

⑶特定寄付信託
信託した金銭を運用収益とともに寄付するものです。当財団は、みずほ信託銀行と特定寄付信託に関して契約しています。
詳細は左記にお問い合わせ下さい。
みずほ信託銀行
（電話：〇三・三二七四・九二〇三）

⑷遺贈
「遺贈」によるご寄付・相続財産のご寄付を承っております。
「遺贈」とは、遺言により、ご自分の財産を特定の人や団体に分け与えることをいいます。受取人として、法定相続ではなく遺言書により、一部又はすべての財産の受取人として、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団をご指定いただくことができます。
財団に寄付をされた場合、相続税の控除を受けることができます。
遺贈をご検討いただく際は、お電話かメールにて当財団までご相談下さい。

⑸商品券・図書券等による寄付
ご家庭のタンスや事務室の机の中等で眠っている、未使用の商品券、図書券、切手、収入印紙、ビール券、お米券、旅行券、ＱＵＯカード、テレホンカード、書き損じ葉書等もご寄付として受け入れております。
お送りいただく場合は、当財団事務局宛てに封書にてご郵送下さい。

＊　＊　＊　＊　＊

●税法上の優遇措置

当財団は、「公益財団法人」としての認定を受けておりますので、賛助会費・寄付金（募金）には税法上の優遇措置が適用され、所得税、法人税等の控除が受けられます。詳しくは当財団ホームページでご確認いただくか事務局までお問い合わせ下さい。

＊　＊　＊　＊

☆財団案内及び賛助会員入会申込書のご請求、その他ご質問等お問い合わせは財団事務局までご連絡をお願いいたします。
（電話：〇三・五六八五・二三二一）

遺贈寄付相談窓口のお知らせ

当財団はＲＥＡＤＹＦＯＲ株式会社と連携し、遺贈によるご寄付や相続財産のご寄付に関するご相談を承っております。
遺贈や相続に関してご質問やご相談がございます場合は、お気軽に以下の宛先までご連絡ください。
※レディーフォー遺贈寄付サポート窓口（https://izo.readyfor.jp/）は、遺贈に関するご相談を受ける窓口で、何度でも無料でご相談できます。
〈お電話でのご相談・資料請求〉
レディーフォー遺贈寄付サポート窓口
０１２０・９４８・３１３（通話料無料）
受付時間：平日10時～17時（年末年始除く）

助成金の申請に関するお知らせ

令和七年度の助成事業に係る助成金の申請について、左記のとおり受付を行う予定ですのでお知らせします。なお、詳細は、当財団ホームページ（助成金のご案内）でご確認下さい。

【申請時期（予定）】
例年実施の文化財保護、芸術研究に係る助成事業
令和七年一月十日～二月末日

今号の表紙

平山郁夫　タジマハール　インド　1983年

インドのアグラにあるタジマハールは、ムガール帝国第五代皇帝のシャー・ジャハーンが一六三一年に死去した愛妃ムムターズ・マハルのために建設した総大理石の墓廟である。
平山画伯は一九八二年の年末から翌年にかけて仏跡の取材のためインドを訪ずれている。この時、アグラの地も訪ずれた。朝霧がたちこめる中、そそり立つ幻想的なタジマハールの姿にすっかり魅了されてしまった、と画伯は後に語っている。

タジマハール　インド　1983年

編集後記

今夏も猛暑日の連続でした。そのせいでしょうか、十月とは言え上野の山にはまだ紅葉の気配はありません。ただ銀杏は、あちこちに落下していて、踏みつぶされた実が周囲に独特の匂いを放っています。これも秋の上野の山の風物詩でしょうか……。
九月末に中国江西省撫州市で第17回日中韓文化交流フォーラムが開催されました。六年ぶりの中国。ユニークな内容満載のフォーラムの詳細は次号新春号でご報告いたします。

広報誌「絲綢之路（しちゅうのみち）」（シルクロード）
二〇二四年　秋号　通巻第一〇六号
●
★令和六年十月二十八日発行
★編集発行／公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団　事務局©
〒110-0007 東京都台東区上野公園十二－五十
電　話（〇三）五六八五－二三一一
ＦＡＸ（〇三）五六八五－五二二五
URL:https://www.bunkazai.or.jp/
E-mail:jimukyoku@bunkazai.or.jp
★印刷　エイ・エス・アドバンス株式会社